

R. Browning の *Pauline* : Identity の確立を目ざして

—— Eros における死と生 ——

野 口 忠 男

- I はじめに
- II *Alastor* における Eros と narcissism
- III *Pauline* における自我と Eros
- IV God と Identity
- V おわりに

I はじめに

Pauline(1833)は、Browning 二十歳の時の処女作品であり、幾多の未熟さは避けられないが、詩人の進む方向性を暗示しているように思われる。これには、Wordsworth の *The Prelude* 「序曲」のごとき自叙伝的色彩が濃く、詩人が景慕していた Shelley の *Alastor* (1815) からの影響が見られる。しかし、*Pauline* の詩世界は、Shelley の思想的成長と内向的感覚を踏まえた延長線上に開花したものである。詩作品は、断片をつなぎ合せた形になっており、思想的に揺れ、確固たる vision を把握するまでには到っていないと言える。私は、この小論を *Pauline* の主人公「私」の過去と現在と未来をつなぐ Identity の確立を模索する観点から論及してみたい。自己確立の軌跡を探ることによって、Browning の詩作品を貫流するさまざまな根源的要因の萌芽や詩構造の原型をかなり認めることができると思われるからである。その際、*Alastor* と *Pauline* の類似点と相違点を考慮に入れつつ、特に自我と人間の根源と永遠への憧れなる Eros との係りについて考えてみたい。父権的文化の中で Eros の果す役割の範囲を知ることにより、Browning の

詩世界の核心の一端を捕えることが出来ると思われる。

Pauline の分析に入る前に、*Browning* の *Shelley* への熱烈なあこがれと詩構造を略述しておくことが、作品を理解する上で有益と思われる。*Browning* は、十三歳の時、*Shelley* の信奉していたゴッドウインの合理的理論を詩化した *Queen Mab* に魅惑され、一時菜食主義と無神論に陥ったこともある。*Pauline* には、無神論の痕跡が認められる。以後 *Shelley* へのあこがれがますます強まって行ったことは、*Shelley* を賛歌する詩篇に、または *Essay on Shelley* に示され、伝記的事実としても実証されている。*Pauline* には彼の強烈な影響が投影されていることは言うまでもないことである。

詩構造は、両詩とも自叙伝的色彩が濃厚であり、告白形式の自由詩で、副題と解説が添えられている。主人公はともに強力な自我を持ち、理想の世界を追求する。*Alastor* の主人公「詩人」は、悲観的な閉鎖世界に向かい、*Pauline* の主人公「私」は、楽観的な開放世界に向かう。両詩における *Eros* の係り方はそれぞれ異なり、本論の無視できない論点である。

自我の確立の原点とも言える *Alastor* と *Pauline* の主人公の幼少年時代を考えておきたい。二人とも自然から、*Wordsworth* のごとく “natural piety” 「自然に対する敬虔なる念」を受ける。“solemn vision, and bright silver dream” (1) 「壮嚴な幻ときらめく銀の夢」で象徴されているように、自然に対する神秘的感情を体験するのである。自然と詩人との関係も詩人が成長するにつれて変貌し、*Alastor* では、次のようになる。

Mother of this unfathomable world !
Favour my solemn song, for I have loved
Thee ever, and thee only; I have watched
Thy shadow, and the darkness of thy steps,
And my heart ever gazes on the depth
Of thy deep mysteries. (2)

現象としての自然を熟視し、その背後に実在するものを捕える態度である。さらに自然は、主人公の理想追求の過程において、彼の心的世界を

暗示し、それを象徴的に表現するために利用されている。*Pauline* では、自然が主人公の心の中に流入し、魂の諸相を象徴的に表現するのに巧みに用いられている。しかし、Browning は、自然の背後を追求することはしない。続いて *Pauline* の主人公は、“wisest ancient books” “いと賢明なる古代の書物”を読みあさり、例えば、ホーマーの「イリヤッド」に興味を抱いて行く。この様子は、晩年の作“Development”に描かれている。古典から次第に、絵画・音楽・ドラマに魅せられて行く。「私」の自我は、豊かな美と知の滋養分を吸収して行くのである。幼年時代の回想は、現在の自己の在り方を知り、未来へ向うときに、魂の源泉と進展の確認と言えるものである。*Alastor* の「詩人」も、精神の遍歴を体験する。“high thought” “高き思想”を求めて、彼の精神の原点とも言える文明の曙の地へ向って巡礼の旅を行う。つまり Athens, Tyre, Balbec, Jerusalem, Egypt, Arabia とオリエントの方向へ進んで行く。

ここで注意しておくべきことは、*Pauline* の「私」の少年時代における宗教体験である。

I saw God everywhere;
..... I felt
His presence, never acted from myself,
Still trusted in a hand to lead me through
All danger; (3)

この God への汎神論的な宗教体験は、「私」の Identity の確立を考へて行く上で誠に重要な要因である。しかし、*Alastor* の「彼」には、God と呼べる宗教体験は見られないし、絵画・音楽・ドラマへの傾倒も見られない。さらに二人の自我の核心をなす気質について、少し考へておく必要がある。一貫して *Alastor* の「私」には、“solitude” “孤独”な陰影が強く見られ、*Pauline* の「私」には、“weakness” “弱さ”がある。これらの気質を強力な自我に推進させる生命的エネルギーとしての“powers”や“passion”は共に押え切れない程常に激しく沸き出し、ただ進む方向が異なるのである。

II *Alastor* における Eros と narcissism

幼少年時代の自我を概観したので、*Alastor* に於ける Eros の役割を考えてみたい。知識追求の旅の途上、「詩人」は自己犠牲としての愛を捧げる“an Arab maiden”に出会うのである。彼は知識欲に捕われているため、彼女を無視する。現実の女性の献身的な愛に Eros を感得できないということはいかなることであろうか。思うに、彼は自己中心的な性格のために、“human sympathy”を持つことができないのである。そのためにますます“self-centred seclusion”「自己中心の世界」に引きこもり、自我は拡大するのではなく、閉鎖する兆候を強めて行く。もし仮に、彼が彼女から、ダイモニックで根源的な生命力を宿す Eros を得ていたなら、人間的な共感の能力を喪失することはなかったと思える。彼の Eros の現れる世界はどこかと言うと、夢の世界なのである。私達は、夢の中に現れた幻想的とも言える Eros の働きについて見て行きたい。

彼は知識追求に疲労困ぱいし、プロミーシュースがつながれることになる Cashmere の谷で眠っていると、“A vision”がやって来る。この「幻」は、“a veiled maid”「ヴェールのおとめ」である。彼にとって彼女は、理想的な愛の化身であると思われる。つまり孤独な自己中心的な知識欲にとらわれた彼が追求する官能的にして幻想的な Eros なのである。ユング流に言えば、「詩人」の無意識界に眠る理想的な分身いわゆるアニマと言ってもよいようなものである。この妖麗な官能的 Eros は、彼の生得の強力な自我を完全に捕え、彼は狂おしき幻の Eros の力に引き込まれていく。対象こそ異なるけれど、自然の“beauteous forms”から受ける Wordsworth の“aching joys”「苦しいばかりの歓喜」や“dizzy raptures”「目くるめくような恍惚感」に一脈通じる自己愛のもたらす法悦境である。

He reared his shuddering limbs and quelled
His gasping breath, and spread his arms to meet
Her panting bosom: ... she drew back a while,
Then, yielding to the irresistible joy,

With frantic gesture and short breathless cry
Folded his frame in her dissolving arms. (4)

「ヴェールのおとめ」も、はじめのうちは、Keats の“*La Belle Dame Sans Merci*”の“a lady”のように、彼の能動的な行為に身をかわしていた。しかし次第に、受動的態度から積極的姿勢へと変って行く。ついに彼とおとめの愛の交歓が到来する。このエクスタシーの世界において、知識を追求する自我と理想的な官能的愛が、一つに融合し、孤独な心のよみがえりが成就出来たかに思われる。しかしこれは、夢幻世界で生じた一瞬の「幻」であり、覚醒と現実のタナトス的な力には、もろくもほろび去るものなのである。彼は、自然の背後を追求するごとく、飛び去って行った「幻」を、“Beyond the realms of dreams”「夢の世界を越えて」、*“He overleaps the bounds”*「夢の世界の限界を乗り越えて行く」のである。Wordsworth は、Lucy 詩篇で、Lucy の死を契機にして自己の復活を成し遂げ、彼女を大自然の軌道の中に永遠化することに成功している。一方 Keats は、“*Ode to a Nightingale*”や“*To Autumn*”等のオード群において、美の極地に永遠の生の可能性を垣間見ている。しかし、「詩人」は、夢の世界を飛び越えて、その背後に根源的生の意味を見出そうとする。“beautiful shape”のおとめを求めてのさすらいは、湖、洞窟、泉、樹木、滝、断崖と続き、これらの象徴的な自然描写は、*Ancient Mariner* のごとく、「詩人」の内的世界の永遠に満たされない孤独と焦燥の心的状態を暗示しているものと思われる。

流動的自然の背後に非情な“shadow”や“darkness”さらに“black death”を凝視する「詩人」は、官能的にして幻想的な Eros の背後に何を見るのであろうか。彼は、自分の近くにいる“fair fiend”「美しき悪魔」に気付かずに、絶えず押し上げて来る衝動にかられ、孤独な死神に向ってまい進して行く。

A restless impulse urged him to embark
And meet lone Death on the drear ocean's waste; (5)

彼は、最も深い闇の底“that immeasurable void”を見おろす。彼を

魅惑した官能的にして幻想的な Eros に満ちた理想的愛の姿はどこにもみつからない。この“darkness”の世界には、明と暗の二面を持つ“great Mother”と同様に、“death”神殿が建っており、“colossal Skeleton”の影が見えて来る。「幻」のおとめの背後には、復讐の靈つまり死神がいて、まるでアドニスにおける幽界の女王のように、彼の生を呑み込もうとするのである。

The Poet's self-centred seclusion was avenged by the furies of an irresistible passion pursuing him to speedy ruin. (6)

自己中心的な自我の破滅をいかに解釈したらよいのであろうか。死に到りつくまで、官能美に満ちた靈妙なおとめの Eros の原点を、情熱のうずくに翻弄されながら追求して行く例は、「トリスタンとイゾルデ」に見ることができる。情熱的な Eros は、最終的に己の破壊につながって行くところに、Eros におけるアンビバレント性、つまり美と愛への憧憬の背後に息づくダイモニックなタナトスの残酷な力を見ることができる。この時の Eros は、自己を高き理想界へ引き上げる根源的な生命力とはならず、死を内包した自己愛的な Eros に変貌しているのである。プラトンによって述べられている Eros は、最高のイデアへの仲介者としての働きをなすものである。「彼」は観念的な利己心の中へ、Eros そのものを自己愛的に求心的に追求して行ったために、生命的知恵を見ることもできず、復讐の悪靈に取りつかれ、最終的には、Narcissusのごとく死に陥るのである。これはイデアへの願望を欠く彼の感情の幼児性・未熟性から起因する narcissism と考えることができる。それでは Pauline の「私」は、Narcissus 的状況に落ちながら、いかにこの危機的状況を乗り越えていったのであろうか。次に「私」の identity の確立を追求する姿を見ることにしたい。

Ⅲ Pauline における自我と Eros

Shelley からの強大な影響、宗教に対する懷疑、詩人としての使命と

R. Browning の *Pauline* : Identity の確立を目ざして

不安, “weakness” な内向的性格, 合理的な時代思潮などが複雑にからみ合い, 「私」の魂は, *Alastor* の「詩人」のように, 暗黒の淵に落ち込んでいる。

I was a fiend in darkness chained for ever
Within some ocean-cave; (7)

「私」も *Alastor* の「詩人」が夢を見たように, 白鳥と神の象徴的な夢を見る。「私」は夢の中で一瞬悪しき拘束の運命から脱出可能と思える “A strange delight” 「不思議な喜び」を感じる。

It is most fair to me,
Yet its soft wings must sure have suffered change
From the thick darkness, sure its eyes are dim,
Its silver pinions must be cramped and numbed
With sleeping ages here; it cannot leave me,
For it would seem, in light beside its kind,
Withered, tho' here to me most beautiful. (8)

“free joy”, “pure”, “fair”, “soft”, “silver pinions”, “beautiful” の語句からも推測されるように, この白鳥は, 美しき永遠性を秘めた女性の化身と思われる。Imagery の辞典に当たってみると白鳥は, 美と豊じょうの女神であり, 純粋性や永遠性さらに詩歌を象徴しているのである。つまりこの白鳥は, 「私」にとって, 美と愛と献身の聖なる Eros を内包した存在であると言えるものである。「私」の墮落した魂を守護し見守っている。次に夢に現われた神の姿を見てみたい。

I watched his radiant form
Growing less radiant, and it gladdened me;
Till one morn, as he sat in the sunshine
Upon my knees, singing to me of heaven,
He turned to look at me, ere I could lose

The grin with which I viewed his perishing: (9)

神の姿は、こん然と光り輝き、墮落した魂の闇の世界への太陽と考えられるものであり、否定的生への光明であることを暗示していると取れるのである。「私」に天国の歌を歌ってくれる温和な神ではあるが、「私はおまえに対して神なり。」と言ひ残して、断固として立ち去って行く姿には、愛ときびしき力の二面性がうかがわれる。*Alastor*の「詩人」は、夢に現れた幻のおとめの背後に存在すると思われるリアリティを追求していったのであった。しかし「私」は、白鳥と神の夢の背後を求めようとはしない。これは「詩人」のような自己中心的な愛ではなく、自己となんじとの関係に立っているものであり、この劇的な関係に「私」の自我の進む方向性が明示されているのである。

ところで Browning は、自我の確立の上で、“dream”をいかに考えていたのであろうか。“dream”について、ここで少し考えておくことが論を進める上で必要である。Shelley は夢を重視していた。Shelley の imagination が、虚空の果まで達するのには、“sleep”と“dream”の闇の世界が、少なくとも必要であった。現象界の事象は、夢の幻想地帯を通して、詩人の観念の世界の中で、流動的なイメージに変わるのである。Shelley は“sleep”について、

For sleep, he knew, kept most relentlessly
Its precious charge, (10)

さらに“dream”について、“the dream...were the true law / Of this so lovely world !” (11) と歌い、“sleep”と“dream”の重要な意義を示している。しかし、Browning は、Shelley のように夢を重視していなかったのである。“sleep”に関して、“What is this “sleep” which seems / To bound all ?” (12)といい、“sleep”は、万象をすべて拘束してしまうと考えたのである。“sleep”は、人間の感性をあざむくものであり、夢に現われた幻の追従を許さないところに、初期 Victoria 朝の合理精神の流布を感知してもよいのではあるまいか。“dream”について、Browning は、次のように歌っている。

R. Browning の *Pauline* : Identity の確立を目ざして

..... errs

Is but a dream which death will dissipate. (13)

that such pleasant life should be but dreamed ! (14)

Browning が、求めようと意図していた詩的世界は、眠りに於ける観念的なイメジ世界ではなくて、

can there be a “waking” point

Of crowning life ? (15)

覚醒された時に於ける真実の生の把握である。このことからして、「私」がたどらなければならない自我の軌跡は、畢竟、目覚めた時における生の実相を把握する方向となるのである。彼は夜の詩人ではなく昼の詩人である。

まず考察しなければならないことは、*Pauline* の Eros の特性である。「私」の自我が、力強い自己に成長して行くために、*Pauline* はいかなる力を「私」に与えているのであろうか。「私」は、幼少年時代、“exquisite fancy”の世界に住み、自然や *Pauline* から生命そのものの喜びを享受していた。*Pauline* との関係は、不安も焦燥も分離もない信頼関係から成立していた。つまり「私」は、母性的な愛情によって保護されていたのである。しかしこの関係が見失われるときがやって来た。「私」は、*Pauline* のもとを去って、Shelley の “my wild dream, of beauty and good”，つまり知的美に魅惑され、“some strange fair world”の桃源境に思いをはせ、悪夢 “a sad sick dream”の渦に巻き込まれてしまったのである。

I was vowed to liberty,

Men were to be as gods and earth as heaven, (16)

「私」は、魂の安息所を完全に見失い、“lost soul” 「失われた魂」のまま闇の世界をさまようのである。ここで、「私」は、再度 *Pauline* に戻って来て、絶望からの魂の新生を求める。自己のすべてを彼女に告白

するのである。冒頭の次の詩句は、「私」と Pauline との Eros の状態を明示している。

Pauline, mine own, bend o'er me—thy soft breast
Shall pant to mine—bend o'er me—thy sweet eyes,
And loosened hair and breathing lips, and arms
Drawing me to thee—these build up a screen
To shut me in with thee, and from all fear; (17)

私達は、Pauline から官能的な Eros の香を多分に感じ取ることが出来る。次の詩句を読んで比較してみたい。

Thou lovest me;
And thou art to receive not love but faith,
For which thou wilt be mine, and smile and take
All shapes and shames, and veil without a fear
That form which music follows like a slave:
And I look to thee and I trust in thee,
As in a Northern night one looks alway
Unto the East for morn and spring and joy. (18)

ここには、官能的 Eros とは異質の母性的精神的な Eros が描かれている。つまり Pauline は、官能的 Eros と神聖な Eros を具備していると考えることが出来ると思える。夢に現れた白鳥のように、Pauline との関係において生じた官能的にして神聖な Eros に保護され、力を感じ、「私」は、“aimless, hopeless state” 「目的もなく、希望もない状態」での拘束された魂を解放しようとする。「私」の告白にもかかわらず、彼女は一語も語らず忍耐強く耳を傾けているのみである。「私」は、過去の魂の絶望状態での苦悶を彼女に切々と語るのである。「私」の最初の願いは、真の生命を把握したいという思いである。

'Twas in my plan to look on real life,

R. Browning の *Pauline*: Identity の確立を目ざして

The life all new to me ; my theories
Were firm, so them I left, to look and learn
Mankind, its cares, hopes, fears, its woes and joys ;
And, as I pondered on their ways, I sought
How best life's end might be attained—an end
Comprising every joy. I deeply mused. (19)

人間の生の諸相を深く認識し、いかなる生き方が最高の生であるかを深く考える。しかし、「私」は、Shelley の天空を飛翔する高き理想の夢に破れ、現実界と理想主義的な理念との亀裂は深まり、何も愛することが出来ない厭世的なひき裂れた自我となる。

First went my hopes of perfecting mankind,
Next—faith in them, and then in freedom's self
And virtue's self, then my own motives, ends
And aims and loves, and human love went last. (20)

I can love nothing. (21)

Nought makes me trust some love is true, (22)

現実界から分離し、孤立化し、絶望の窮みに沈んでいる「私」の魂は、悲惨な様相を呈している。「私」自身の生への動機も目的も愛も消えて行く。「私」は、“doubt and despair”「懷疑と絶望」の闇奥へとつき落され、“darkness”の世界で、魂は“slave”のごとく鎖につながれている。この縛られたプロミューセスのごとき魂の奈落をもたらした主たる要因は、「私」の“self-idolatry”であり、Pauline からの分離である。ついに魂は、虚無の極限に達する。

Life's vanity, (23)

vanity of vanities ! (24)

all life's nothingness, (25)

この虚無の深淵には、*Alastor* の時と同様に、“dark spirit”「悪霊」や“troops of shadows”「影の群団」がたむろしている黄泉さながらの地獄界である。*Alastor* の主人公は、ここで復讐の悪霊に取りつかれ疲労困ぱいし死んでしまったのであった。しかし「私」は *Pauline* の保護のもとに、この虚無のかなたに something なるものを期待しないではいられないのである。ここに監禁された魂からの光明への逆転の鍵がひそかに暗示されている。「私」は、*Eros* の力と something なるものへのあこがれを、幼少年時代からの自我の進転の過程で認めているのである。ユングも語るように、自己の魂の深源において、人間の心中に存在する二元的対立つまり明と暗、聖と俗、霊と肉、生と死、時と永遠が、ダイナミックに統合され、より高次の自己が開眼するのである。そのためには、明暗のケイオス的世界のかなたに偉大なる愛の力を持つものが存在することへの詩的洞察が必要なのである。

「私」の魂に変化が少し生じて来る。魂は下降運動から、絶望を通し *Pauline* からの *Eros* を感得し、かすかにあるものを感じながら上昇運動を開始する。

I cannot chain my soul: it will not rest
 In its clay prison, this most narrow sphere:
 It has strange impulse, tendency, desire, (26)

魂に生じたこの不思議な衝動、生への欲望にかり立てられ、自我は、限りなく膨張する。

I am made up of an intensest life,
 Of a most clear idea of consciousness
 Of self, distinct from all its qualities,
 From all affections, passions, feelings, powers;
 And thus far it exists, if tracked, in all:
 But linked, in me, to self-supremacy,

R. Browning の *Pauline*: Identity の確立を目ざして

Existing as a centre to all things,
Most potent to create and rule and call
Upon all things to minister to it;
And to a principle of restlessness
Which would be all, have, see, know, taste, feel, all—
This is myself; (27)

意識の中心に君臨する自我は、万象の中心に存在し、さらに全てのものを創造し、統治し、束縛してしまおうとする。“have, see, know, taste, feel, all” から理解されるように、「私」の自我は、万象を感覚的・主知的に認知しようとする態度である。この強烈な自我は、さらに全き歡喜を求めて激しく苦悶する。

Myself stands out more hideously (28)

My selfishness is satiated not,
It wears me like a flame; my hunger for
All pleasure, howsoe'er minute, grows pain; (29)

飽満さを知らぬ自我の全き喜びの追求は、“abstractions” 「抽象観念」に突き当たる。パラセルサスのごとく、次に「私」は“knowledge” への追求に向って行く。

This restlessness of passion meets in me
A craving after knowledge (30)

“knowledge” の追求は、“reason”，ロゴスの重視である。「私」は、鎖につながれた愛“Love chained”をも“reason”によって解放しようとする。しかし、自己中心的な理性による愛の解放は、根源的な愛の解放にはなりえない。この問題は、根源的な生命的知恵に到るまでは、根本的な解決はなされないものである。次に「私」は、自我の救済を“thought”に求める。

but I have gone in thought
 Thro' all conjuncture, I have lived all life
 When it is most alive, where strangest fate
 New-shapes it past surmise—(31)

「私」は、“thought”の世界を、全生命が躍動し、新しき生命が形成される場であると確信する。ここに到って、太陽表現に関するイメージが顕著に見られることは、いかなることなのであろうか。“the cold sun”, “sunbeams which will kill”, “the morning air / In the misty sun-warm water”, “the sinking sun”のごとき太陽の出現は、黒い色が死のイメージにつながるとすれば、闇の世界への光明、つまり生への確信の現れといえると思われる。“the moonless night”から陽光の降り注ぐ朝の世界になり、“the sun brightens into the mist”や、“Breaking the sunbeams into emerald shafts”の描写は、鎖につながれた魂の再生の象徴といえるものである。さらに、Sun-treader「太陽を踏み行く者」なる“life and light”「生命と光」の Shelley へと敷衍されて行くものである。“thought”の世界への飛翔にさきだつて、精神の情熱的緊張を得るために「私」は Pauline に呼びかける。

Pauline, come with me, see how I could build
 A home for us, out of the world, in thought !
 I am uplifted: fly with me, Pauline ! (32)

「私」は、官能的にして神聖な Eros の具現者である Pauline の“soft breast”に抱かれて、深き思想の森の“our new retreat”に向つて上昇して行く。Eros を考える上で、飛翔の重要な意味を見のがしてはならない。飛翔に関して、バシュラールは次のごとく述べている。「詩的な魂にとっては、飛ぶことは、意味があり、飛翔こそ存在の原点である。」「私」と Pauline との飛翔には、「存在の原点」を求めて、洞窟から光を目ざし、最高のアイデアの世界へと上昇する Plato 的な Eros の原型が読み取れるのである。Pauline の官能的にして神聖な Eros は、「私」を高めへと導く保護者であり、Alastor における「詩人」の Eros

そのものへの求心的な構造と異なり、Eros の保護的な仲介者的な構造といえる。これは Plato の Eros 論にたいへん近い考え方である。内向的ではあるが、強烈な自我が官能的にして神聖な Eros に保護されながら高みへ上昇する vertical な構造は、円錐形の螺旋運動に似ている。この Eros は、父権的文化の巨大な枠組の中で、identity の確立を成就して行く上で回避することのできない、はなはだ重要な要因である。D. H. ロレンスが、死んだ男を復活させるのに、異教の女神 Isis の Eros を用いたことを考えあわせれば、納得できることなのである。Browning の愛の詩は、父権の神で象徴される陰の部分に照明をあて、聖と俗の Eros の意義を見い出していると読むこともできる。自己を確立する上で父権だけではない女なるもの、つまり肉と美と愛と知慧を具有する Eros の意義を見通していたのである。この事實は、いくら強調しても強調しすぎることはあるまい。

二人の清明な世界への飛翔の足下には、木々・森・川・“snake” や “wild mice” の世界が展開され、まるで原初的楽園のイメージで表現された一大パノラマである。さらに高く飛翔していくと、清浄な陽光の降り注ぐ、大気の世界となり、神の澄みきった慈しみ深い息が感じ取れる神秘的理想国が出現する。

Air, air, fresh life-blood, thin and searching air,
The clear, dear breath of God that loveth us, (33)

「私」は、Pauline に保護されながら、“thought” の高峰に達したのである。はたして「私」はここに到って、絶対的な永遠の知識を獲得することができたであろうか？

My spirit wanders:
Hedgerows for me—those living hedgerows where
The bushes close and clasp above and keep
Thought in—I am concentrated—I feel;
But my soul saddens when it looks beyond:
I cannot be immortal, taste all joy. (34)

“thought”の高みにおいてさえ、「私」は、永遠の生命も全き歡喜も得ることができないのである。ここで挫折することなく、「私」は、生の衝動と実相の把握にかり立てられ、自己の魂の可能性を試みる。“a certain examination of the soul, or rather of his own soul,” (35)からも理解されるごとく、「私」は、さらに魂の進展を思い、根源的なものとの出会いに立向って行くのである。それはいかなるものとの出会いであろうか。

IV God と Identity

それは、夢に現われた God のように、God そのものなのである。

My God, my God, let me for once look on thee
As though nought else existed, we alone !
And as creation crumbles, my soul's spark
Expands till I can say, — Even from myself
I need thee and I feel thee and I love thee.
I do not plead my rapture in thy works
For love of thee, nor that I feel as one
Who cannot die: but there is that in me
Which turns to thee, which loves or which should love.

(36)

これは、新たな God の発見ではない。「私」が、幼少年時代に体験した宗教感情の再生であると思われる。Lawson も *Very Sure of God* の中で指摘しているように、“a return to God” (37)「神への回帰」であると言える。それ故、「私」と God との関係は、ブーバーの説く根源的な「われ」と「なんじ」の関係には、いまだ到っていない。「私」の強力な自我の内奥に God を再発見したまでであり、God への対話も流入もきわめて弱いものである。故に、Blake の絵に明示されているような God からの「私」の存在を根底から揺す振る愛と力の強力な光の流出は見られないのである。 *The Central Truth* の中で、Whittle は、これに関して次のごとく述べている。

R. Browning の *Pauline* : Identity の確立を目ざして

Love is significant in the poem, but it is incomplete; there is a desire for the revelation of God, and the longing for a loving God, but there is no means of coming to know such a God. (38)

Whittle の指摘からもわかるように、「私」と Pauline の飛翔は、Agape ではない Eros にもとづく God を愛することへの切願であったのである。

「私」は、Pauline の官能的にして神聖な Eros に保護され、神への vision に目醒め、Sun-treader なる Shelley の霊を高みに仰ぎ、詩人としての自覚を形成して行く必要を感じる。

As I again go o'er the tracts of thought
Like one who has a right, and I shall live
With poets, calmer, purer still each time,
And beauteous shapes will come for me to seize,
And unknown secrets will be trusted me
Which were denied the waverer once; but now
I shall be priest and prophet as of old. (39)

詩人としての使命に燃え、未来への希望が語られている。人生の真実を観る心眼を持ち、Wordsworth のごとく “beauteous shapes” の実相を直視するとき、いつの日にか詩人に根源的な知られざる神秘が明示されることになろう。「私」は、“priest”として、“prophet”として詩の道を求めて行く決心である。これは、「私」が、God との間に根源的な関係を樹立し、“real life”を洞察し、この時把握した生のリアリティを、詩人として、世人に訴えて行く人道的立場と解される。“weakness”な自我から始まって、官能的にして神秘的な Pauline の Eros に保護され、「生と光」の Shelley を高く仰ぎ、プラトンの思想から God へと進んできた「私」の Identity の確立への歩みは、詩人としての使命を自覚するに及んで、ほぼ原型は成し遂げられたのではないかと思われる。

V お わ り に

私達は、*Alastor* の「詩人」と *Pauline* の「私」の Identity 確立の歩みを、Eros を中心にして見てきた訳である。それぞれの主人公に見られる大きな相違点は、すでに論述して来たように、孤独な自我と内向的な自我、夢と覚醒の詩的世界、Eros の求心的な閉鎖的構造と保護的な解放的構造、無神論と神への回帰などが考えられ得る。私達は「私」の Identity の確立への原型を、神を本源とした キリスト教の Agape ではなく、Eros のアイデアへの上昇なる生命的知恵の追求ととらえることにより、詩人 Browning の進むべく方向性が、ここに暗示されていることを知る。絶対的なものに憧れそれを夢の背後に補えようとした *Alastor* での Eros は、虚空の深淵に潜むタナトスへの下降となり、*Pauline* での Eros は、ダンテの「神曲」やゲーテの「ファウスト」の神聖な美神のように、高き God への案内者であり、詩の守護者であり、生の不安を守る保護者であったと言える。これはまさにプラトンさらにプロティヌスが信じていた Eros 観に近いものを内包していると見ることができる。Identity の確立に際して、根源的な創造に係る Eros の偉大な役割を認知することにより、父権世界の心的構造に Eros の深さと広がり照明を投げかけることができると思われる。「詩人」が、絶望を通して、再認識した魂の告白を次のごとく語る時、Erosこそ、「God」や“truth”や“love”を“believe”「信じる」ことへの、根源的生命エネルギーとも言えるものなのである。

I believe in God and truth
And love, (40)

〔註〕

- (1) P. B. Shelley : *Alastor*, l. 67.
- (2) *Ibid.*, ll. 18-23.
- (3) R. Browning : *Pauline*, ll. 302-7.
- (4) *Alastor*, ll. 182-7.
- (5) *Ibid.*, ll. 304-5.

R. Browning の *Pauline* : Identity の確立を目ざして

- (6) Preface in *Alastor*.
- (7) *Pauline*, ll. 99-100.
- (8) *Ibid.*, ll. 105-11.
- (9) *Ibid.*, ll. 114-9.
- (10) *Alastor*, ll. 292-3.
- (11) *Ibid.*, ll. 681-6.
- (12) *Pauline*, ll. 812-3.
- (13) *Ibid.*, ll. 978-9.
- (14) *Ibid.*, l. 985.
- (15) *Ibid.*, ll. 813-4.
- (16) *Ibid.*, ll. 425-6.
- (17) *Ibid.*, ll. 1-5.
- (18) *Ibid.*, ll. 42-9.
- (19) *Ibid.*, ll. 441-7.
- (20) *Ibid.*, ll. 458-61.
- (21) *Ibid.*, l. 310.
- (22) *Ibid.*, l. 554.
- (23) *Ibid.*, l. 237.
- (24) *Ibid.*, l. 488.
- (25) *Ibid.*, l. 493.
- (26) *Ibid.*, ll. 593-5.
- (27) *Ibid.*, ll. 268-279.
- (28) *Ibid.*, l. 647.
- (29) *Ibid.*, ll. 601-3.
- (30) *Ibid.*, ll. 620-1.
- (31) *Ibid.*, ll. 702-5.
- (32) *Ibid.*, ll. 729-31.
- (33) *Ibid.*, ll. 788-9.
- (34) *Ibid.*, ll. 805-10.
- (35) Ian Jack, *Browning's Major Poetry* (Oxford at the Clarendon Press, 1973), p. 19.
- (36) *Pauline*, ll. 822-30
- (37) E. LeRoy Lawson, *ery Sure of God* (Vanderbilt University Press Nashville, Tennessee, 1974), p. 28.
- (38) William Whitla, *The Central Truth* (University of Toronto Press, 1963), p. 13.
- (39) *Pauline.*, ll. 1013-19.
- (40) *Ibid.*, ll. 1020-1.

On Identity in *Pauline* by R. Browning
— Death and Life in Eros —

Tadao NOGUCHI

- I. Preface
- II. Eros and narcissism in *Alastor*
- III. Self and Eros in *Pauline*
- IV. God and identity
- V. Conclusion

Pauline (1833), Browning's first published poem at the age of twenty, seems to indicate his coming poetic direction in spite of some unskillful points and immature thought. The poem is thoroughly autobiographical, like *The Prelude* by Wordsworth, and we can find the effect of Shelley's *Alastor* upon the poem. The poetic world of *Pauline* may be an extension of the development of thought and vision of Shelley.

This paper attempts to search the identity of a persona, or "I", from past to future. Doing so, we will understand the original structures and fundamental elements flowing through his poetry. When we consider the process of self-realization, paying attention to the differences and similarities between *Alastor* and *Pauline*, we will especially try to examine the relationship between self and Eros. We come to realize the role of Eros in the world of paternal culture.